

一夜の記憶は継がれる

ストームテラー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブラボがわかる人にはある程度の解釈ができるかもしれませんが、そうでない方には少しきついかもしれません。一応ブラボ要素は強くなりすぎないようにしますが（強くないとは言っていない）。結局素人作なのでご了承ください。双方の作品からキャラを出す予定です。今後増える予定でもあります。あと処女作なので手探りで書いていきますゆえ戸惑わせる場合があるかもしれません。それでも良ければご覧ください。

目次

| | |
|------------------|----|
| 記憶 | 1 |
| 記憶 2 | 6 |
| ズレが生み出す色々 | 13 |
| 記憶鮮明、恐怖倍増、酔いは十分？ | 21 |
| 安全策は苦勞が絶えない | 26 |
| ヤーマムは取り扱い注意 | 33 |

記憶

「そうさね…あんたにはどう映ったんだい」

「ヤーナムのことですね、そうですね悪夢ですよ少なくとも私にとっては」

「そうかい、そりやよかったよ。あれ以上なんてあつていいもんじゃない…：まあ、ヤーナムもあつてもいいものではないがね」

何の話をしている。誰なんだ。少なくとも私の記憶にはない。ドクター…君に記憶はないんじゃないのか？

「ぐへへへ疲れるな〜ホシ「何がいいですドクター」…コーヒーであ、ミルクも頼む」

「了解です」

「にしても仕事量おかしいと思うんだよな〜ホシグマが居るとはいえ」

「まあまあ、皆さん忙しいですから仕方がないですよ」

まあわかつている。ロドスは製薬会社であり日々へ鉱石病（オリパシー）の治療法や感染者への支援、それだけにはとどまらず鉱石病発症患者たちによるテロ行為や略奪行

為などの対処を行う軍事的組織としての活動もある（ぶっちゃけこっちの対応が大変）。この二つを管理するのは非常に大変なのだ。治療法探しのみに傾いてしまうとどんどん感染者たちの立場、安全が損なわれてしまう。逆に軍事的色を強くしてしまうと製薬会社としての信用、立場がなくなってしまうため非常にバランスが重要なのだ。

「あゝ、肩こるよこれじゃ」

てかもうこつてる、ちよつと動かすだけで痛みが走つて動くに動けない

「どうぞ、「ありがとう」そういうえば今度休みがありますよね」

「ん、あゝあるな、でも予定ないんだよね」

しまった、こんな話を部下にするもんじゃないのに

「でしたら今度小官と龍門へ一緒に出掛けませんか。もちろんドクターがよければの話ですが」

おや。

「いいのか、こつちとしてはうれしくらいだよ」

「では、予定は決まったということ、仕事を再開しましょう。楽しみがあるだけでもやる気は出るものです」

「確かに、その通りだな」

龍門にて

「ホシグマ、龍門で行きたいところでもあるのか」

龍門の街の知識はほとんどが地形や立地、独自のルールくらいだ。デートに使える知識は空に近い。

「特にはないんだが、ドクター龍門の街についてはわかるのか？」

「いや、ほとんどだな」

「じゃあ私が龍門の案内役を務めさせていただく。色々案内できるはずだ」

ああ、なるほど、ホシグマは私が龍門についての知識がないのを予想していたようだ。こんな気遣いができるのは彼女の素晴らしさというほかない。記憶が一生戻らなかつたら彼女と…なんてことを考えてしまうものだ。

「……………」

ドクターはホシグマに案内してもらっている中で露店街にてあるものを見て足を止めた。

それはアクセサリーを売っている店に並べられていた一つの売り物だ。

〈耳飾り〉

黄色を基調としたデザインで、明るい黄色をした石が埋め込まれている。特に目立つ

ようなものでもなく高価なものでもないが綺麗にされている。

「おばあさん、これください」

「はい、〇〇になります」

「おくい、どうしたんだドクター」

「ホシグマ、これ、もらってくれるか」

それは、記憶を失った男の小さな、だが確かな意思なのだ。

ホシグマは突然の贈り物に驚きつつもすぐに

「ふふ、ありがとう大事にしよう」

そんな甘い展開もありつつ案内は続いた。強いてあげるならばホシグマとの物理的距離が近くなったことくらいだろう

「ドクターもうそろそろ日が暮れるが夕食、行きたいところがあるんだがいいか。そこそこいい酒も出してもらえる。いい店だ」

「いいぞ、だが私が下戸なのは知っているだろうあまり飲ませるなよ」!?

「わかっている。ちゃんとそこは配慮できる」

どこかのフェリーンが似たようなセリフを吐いていたきがするがまるで信憑性が違う

ブレ「クシユン!?!…?」

ホシグマが連れてきてくれた店は出てくる料理も酒もいいものだった。料理に関してはロドスも負けてはいないがロドスでは出ないようなものもあり料理の奥深さを知ることができた。

「ドクター、どうだったここは」

「料理も食べたことのないおいしいものばかりだったし、店も清潔で掃除が行き届いていることがわかる。雰囲気も良いし、酒も良いものだ。仕事に対しての誇りを持っているのだろうか。いい店というのもうなすける」

「ふふ、そうか、それは良かった。連れてきたかいがあとというものだ」

「そろそろ、お暇しようか。遅くなりすぎるわけにはいかないからな」

「そうだな、帰るとしよう」

店の扉をでた。

「暗いな、思ったより長居していたようだ」

「夜道には気を付けましょう」

記憶 2

店の外は日が昇っていたところと比べて人だかりは多くはないがそれでも人はたくさ
んいる。さすがは龍門といったところか。

う〜ん頭が痛むな、あまり飲んだ記憶はないんだが浮かれていたのかもな。二日酔い
かもな、仕方ないこればかりは我慢するしかない。これから帰るわけだしな。それに
してもさつきから妙な匂いがする気がするんだよな落ち着くような…香草…の匂い？

ズキツ！

「が!？」

ドクターが急に頭を抱え苦悶の声を漏らす。

痛い!………なんだ!?!これ?街?ヤーナム?血の医療?獣?宇宙?悪夢?赤子?
上位者?…狩人へかりうど?なんだこれ、私の記憶?

『あんた あまり手を汚すんじゃないよ 狩人狩りなど、あたしに任せておけばい
いのさ クククククッ』

『獣はもはやとめどなく 狩人はもう、用無しさ あんたの血を! 狩人の血を! あ
んたの死を! 狩人の死を! そうして悪夢を終わらせるのさ!』

!? まて!この匂いは知っている。パヒューマーの調香するものじゃない『彼女』がつけていたものだ。でもなぜ?ここはあの悪夢でも、ましてやヤーナムでもないのに……

「ドクター!ドクター!どうしたんですか!何かありましたか?」

「はっ!?すまないホシグマ…少しな」

周りをチラツと見てみると私たちはかなり目立っている。ホシグマが大声で私を呼んでいたことが主に気を引いてしまっていたのだろう。まだあの匂いはしている。やはり間違いではないようだ。

探さないと、この記憶が正しいのか確かめるには探し出す他にない。やはり人は多いが、ああ記憶は確かのように、【狩人狩り】だ。すぐに追いかける。人々は歩いていく『彼女』を避けるように歩いたため追いかける際『彼女』が視界から外れることはない、あと5メートルのところまで来たとき『彼女』はこちらを振り向く。その姿は鴉へからす〜と思われる羽で作られたマントを羽織りペストマスクを着け鴉を思わせる格好をした恐ろしさ感じさせる恰好。また、雰囲気を持つ性別の判別のつかない人物だ。

「どうしたんだい、あんた」

声は老いた女性の発する声であった。どうやら、あちらもこちらを認識したようだ。

「すみませんね。実は「ドクター!どうしたんだ!今度は?」ん?ああすまんなすつかり

ホシグマのことを忘れていたよ」

「む、それはひどいぞドクター……ん？ドクターそちらのお方は、もしかしてお知り合いだったりますか？ないとは思いますが」

「いいや、初対面なはずだよ。あたしに知り合いなんてほとんどいないからね」

「ええ確かにあなたと私は知り合いではありません。ですが少し話をする時間をくれませんか？」

「急にそんなことを言われてもね、損得の話をしたいわけじゃないがあたしに何かあるわけじゃないだろ」

やはりか、だが心配はしていない。

「一つだけ確認させてください。あなたはヤーナムという街をご存じですか?!」

「ほう、ヤーナムね、こりゃ少しあたしもあんたら聞きたいことができたよ、話だったか、どうする？」

一瞬にして彼女から刺すような視線が向けられた。ペストマスクの双眼がこちらを向く。それに反応してホシグマも臨戦態勢で構えるが直ぐに手で制す。ホシグマは何か言いたげだが直ぐに構えを解く。正直助かる。さすが龍門近衛局エリート。

「実は私、ロドスアイランド製薬会社の者しています、出来ればそちらで話をしたいんですがいいでしょうか」

「いいんですかドクター」

おそらくホシグマの言いたいことはこんなに怪しい人物を入れてもいいのか、自分の立場をわかつているのかというところだろう。

「いいんだ。これは必要なことだから」

「ふくん、まあいいさね。だがこんな時間だ今からでも行くのかい」

「ええ、大丈夫です。ロドスはほとんど動いていますから問題ないでしょう」

「そうかい、じゃ、案内してくれ」

「ではそうしましょう、道はこつちです」

それから三人とも終始無言だった。彼女はずっと何かを考えこんでいるようだったので声をかけるにはいかなかった。ホシグマもそんな様子を察して静かについてきてくれた。

それから、ロドスに入るときに少し時間がかかった。やはりいきなり怪しい人物を入れるほど甘くはないらしい。私が連れてきたことを伝えるとどうやらケルシーにまで届いたらしく、根掘り葉掘り聞かれたがこればかりは説明のしようがないので応接室を開けてくれとお願ひしたところケルシーも立ち会うということと条件に許可された。正直難しいと思つたが予想以上に私が客を連れてきたことに興味を持ったらしい。

「ここが応接室になりますね。どうぞ座ってください」

はは、どうしたものか、今この部屋には私含めて5人が集まっている。私とホシグマと目の前に座っている彼女とケルシー、そしてケルシーの私兵のレッドだ。聞きたいことは多いがまずこちらから話すべきだろう。

「お互い信用がないものだね〜」

「はは、すみませんね。これじゃお話どころではないレッド。降りてきなさい」

!?!この場にいるドクターと彼女以外の全員がその言葉に驚愕を表情を見せた。

ストツ「なんでわかったの」

ドクターの言った通りレッドは上から降りてきた。三人が驚いた原因は、ドクターがレッドの存在はともかく位置を把握していたこと、そしてドクターの対応に間違いがなければ初めてロドスを訪れた彼女がレッドの存在に気付いていたことになる。

「その説明は難しいな、だが意味のない潜伏をさせるくらいなら堂々としてた方がいいからな」

「あたしは気にしてないから話を始めようじゃないか」

「そうですね、名前は《アイリーン》さんで合ってますね」

「あたしの名前まで知ってるのかい、あんた誰なんだい。本当は昔に会ってるんじゃないかい?」

「どうでしょう、私は実のところよくわかっていません。そのために少し話をします、も

し引つかかるところがあれば途中で質問してください。これでいいですか？」

「ああ、かまわないよ」

『ある男がヤーナムを訪れました。そこは医療の街として栄えていた大きな街です。男は病を治すためかはたまた好奇心を満たすためか。万病に効くとされる輸血を受けに来たのです。ある男の話です。その男はヤーナムのヨセフカ診療所にて目を覚ましました。ですが、男には一切の記憶を持ち合わせていませんでした、自らの名前すら思い出せません。そばには直筆と思われる手紙『青ざめた血を求めよ』と男には選択肢はなくその言葉通りに青ざめた血を求め探し出しました、ですがヤーナムには一つ問題がありました。それは、街全体に蔓延した獣の病と呼ばれる病気が流行っていたのです。捜索は難航。住民の協力は望めずごく一部の人間のみしか話の通じるものはいません』

「……こまでは、大丈夫ですか？」

「……ああ、続けてもらって構わないよ」

『ですが、探している途中こんな人物に会います。『その姿は鴉と思われる羽で作られたマントを羽織りペストマスクを着け鴉を思わせる格好をした恐ろしさ感じさせる恰好。また、雰囲気放つ性別の判別のつかない人物』彼女は〈狩人狩り〉だと。助言や忠告なんかこのヤーナムでは珍しい人物だ。何やら血に酔った狩人を狩るらしい』

「……………少々話過ぎましたね。どうでした、何か気になることでもありましたか？」

「ああ、聞きたいことが山ほどできちまったよ。ああそうだもうこんな時間なんだ、すまないがここに来る途中に見えたんだがここに寮があるようなんだが一晩貸してくれないかあいにく当てがなくてね」

「ええ、いいですとも。ぜひそうしてください」

(いいよな、ケルシー)

ドクターは目でケルシーとアイコンタクトを取ろうとするがなかなか目が合わない、ようやく合った。少し衝撃的過ぎるか、あと二人はポカンとしている。あとケルシーそんなに睨まないでくれ、これしか思いつかなかつたんだ。あとで説明するから。

とりあえず今日はここまでだ残りは明日だお互い知りたいことはあるだろう。ああ、ケルシーへの説明はそのあとになりそうだ。胃腸薬でも用意しておこう。

「それでは今日はここまで、残りは明日ということだ」

ズレが生み出す色々

「アイリーンさん、寮まで案内しますよ、迷いやすいですしみんなに説明してもいないので」

「そうかい、助かるよ」

「ああケルシーたちはここで待っていてくれ戻ってくるから」

そうしてドクターとアイリーンは応接室から出て行った

廊下歩き中

「あんた、ずいぶん変わったねよく喋るし明るいじゃないか、そんなに変われるもんかね」

「…私は今ドクターとしてロドスに属しています。実は現在記憶喪失中でしてドクターというのは記憶を失う前の私のことでその役割を今の私が代行しているようなものです。どうやら以前の私は相当憎まれているようでしてね、以前の私を知っている者は今でも私に思うところがあるようで色々……。「ん？」もうわかっていてと思いますですが最初から狩人ではありません、昨日あなたに会って狩人としての記憶を思い出したんで

す。だから私はドクターであり狩人としての記憶を持つ、というような認識で結構です」

「……………あんだ、それもつと早く言うべきじゃないかい？」

「はは、わかつての通りヤーナムのことはあまりに冒濫的です、あまり外に出すべきではない、だから今しかないので。それよりもどうしてあなたがこのテラにいるのです？ここは明らかにヤーナムのある地ではありません」

そう、そこだ。なぜテラにアイリーンがいるのかそこが疑問なのだ。

「へえ、ここはテラっていうのかい私も話してないことがあつたね、私は昨日気づいたらあの街にいたんだよ」

二人が歩く廊下に静寂が訪れる

「つまり、当てがないというのとあの目立つ姿は…」

ドクターは理解した！

「あんだ、いや、ここではドクターだったか、あの後どうなったんだい」

…きたか、おそらくヤーナムのことだろう。ここはどう答えるべきか、私の記憶には二つのパターンがある。一つはある狂った狩人にやられたアイリーンに狩人狩りを託される。もう一つはアイリーン自身が狂い私に狩られる。この二つ果たしてどちらだろうか。

「ああすまないねえ、話してなかったか。私があんたに託したとき、あんたに狩られたとき、両方だよ」

え、思わず足を止めてしまった。アイリーンを見るとマスク越しからも苦笑いが読み取れる。思ってもみなかったあの悪夢では誰一人として繰り返し悪夢を認知していなかった。ゲールマンに解釈されたあと見ぎめたのはあの診療所だった。その瞬間なんとなくわかった。終わってないことに、私以外のすべてが同じだった、何もかも、だから必死に探した。狩った狩った狩った。そこには鴉羽の狩人もいた。とうとう月の魔物も狩った。そして上位者になった。けれど結局…

「変わりませんよ、結局ずっと捕らわれたままでした。そして、何も抱かなくなっていました」

「そうかい…もういいよ明日があるんだ。ここには、そのときにしよう」

「そうですね…ここです、それではまた明日」

応接室にて

「いや、今日はみんなすまない、色々と迷惑をかけてしまったな。とりあえず今日はこれで「待てドクター、その前に説明せねばならんことがあるんじゃないか？」

ですよ、そうなりますよね。知ってた。だが

「すまないケルシーこれに関しては説明できないとかまだ私もすべてを把握していない、下手に説明するとんでもない事態になる可能性がある。一先ずここは私を信じてくださいか説明は後日させてもらうから」

とは言ったがこれは一種のお抱えものだ。明かすべきでないそれも一生ものだ。だが、ここに悪夢はない。この記憶も何か有効に使えるかもしれない、まあきつとろくなものではないだろうが

「ドクター、私は君が何か知っているとういうことだけだ。いずれ、すべて話してもらおうぞ」

はいばれた、そうだな、ずっと隠し事をしている状態ではいざれ信用を失っていくのは明確だからな。ここには鉱石病で様々なお抱えを持った人がいる。みんながみんな協力していかねばならないのだから、指揮する立場の者が隠し事なんて不安を与えてしまふ。……でも、だとしてもこれだけは知られてはいけない、多少話したがアレ〈上位者〉の話は絶対として〈医療協会〉もダメだ。下手すると、いや間違はなく。ライン生命のマツドな類ですらゲロは間違いないだろう啓蒙を得るかはどうとして、秘密は甘いものだ。知りたがるのは悪いことではないが、こればかりは絶対だ。はは、まさか記憶を失ったにもかかわらずこんななどでかい秘め事を持つ羽目になるとは、〈時計塔のマリア〉を思い出させる彼女程とはいかないが私も命：賭ける必要がありそうだ。と

なるとアーミヤあたりには気を付けるべきだな覗かれてはいけない。きつと狂うから。
「…ホシグマ、レッド付き合わせてすまないね、もう遅い、戻ってもらって結構だよ。
ああもし続きが気になるなら明日も来てもらって結構だよ。ただし、今日の話は広げら
れては困るくれぐれも他の者に漏らさないでくれ」

「わかりました」「わかった」

「よし、じゃ改めてこれで解散だお休み」

はあ、振れるかな今の私に……………

朝早朝 訓練室

「む、ドクターか休日はどうだった体は休められたか」

そこにはドーベルマン教官が機材の手入れをしていた。

「ああドーベルマン、早いなまだ食堂も開いてないくらい時間だが、いつもこんな時間に？」

「いや、そうではない珍しく早くに起きたのでなこれは待つまでのついでだ」

「勤勉なことだ、ああそうだと訓練室、少し使えるか」

ドーベルマンの手が止まる。そしてこちらを見て

「ほう、なるほどなるほどドクターもその貧弱な肉体を鍛える気が出たか、いいだろうメニューを組んでやる、といつてもドクターの仕事もある時間は考えてやる」

「待って待って、確かに鍛えるつもりはあるがそんなにしてもらうつもりはない今日はいわゆる試しだ」

訝しげにこちらを見るドーベルマンだが

「ああよくわからんが朝食までには終わらせておけ」

「わかった」

そうして訓練室に入ったわけだが何をしに来たのかという昨日の記憶の中にある狩人の狩りの記憶だ。今の私にどれ程の力が出せるのかいい指標になるだろう。まず

は基本的な狩人の技術であるステップだ。結果としてはできなくはないがキレとやはり体力的な問題があるな、ああこれは繰り返すしかあるまい。次は武器だな適当なものでも振ってみるとしよう、出来るだけヤーナムにあったものに近いものがないが、よしこれにしよう。それは身の丈のぶんはあるハルバードだ、〈獣狩りの斧〉に近いから選んだわけだが少し軽めだまあ模擬戦闘に使うものだからだろうな。これは結果としては散々だ、キレもスピードも重みも乗せられない、とてもじゃないが狩人が見たら失笑ものだ。：そしてするつもりはなかったがここまで来てしまった以上やらずに終えるわけにはいかない、内臓攻撃だ、今の私は狩人としての力はないに等しいが言ってしまうば覚悟みたいなものだ。手の代わりに短刀を構え人形の本来内臓のある位置めがけて貫き中身を掴み引っこ抜く。当然人形なので何も無いがこれを人でやるのだ何もかも出てくる。冒瀆的といえぶそうなのだろうが血に酔う狩人としてはこれ以上ないくらい効率的なのだ。結果としては、キレも必要なく、貫く威力も短刀でカバー、簡単だった、だが、いかなな、笑みがこぼれてしまう、これじゃあただのイカレた獣だ。

「誰だ、覗きとは感心しないな」

「あんた、はあ、そんな顔普段からしてるわけじゃないだろ、じやなきやあんな関係は築けない。控えることだね」

しまった。これが一番だろう、どうも記憶に引っ張られている。今の表情をオペレー

ターに見られでもしたら瞬く間に広がり少なくともWあたりには即殺されるのが目に見える。気を付けなければ。

「どうも狩人としての性が表に出る。酒にも酔うし血にも酔うといったところか、抑えるのは相当だぞ」

「人間悩みは尽きないと言うみたいだがあんたにお似合いだね」

「冗談きついで、知らんと思うがロドスは曲者ぞろいなんだ。下手したら生死に関わる問題なんだ」

「まあいいさ、それよりなんでこんなことしてるんだい、まあ、理由はなんとなく分かるが、笑つちまう動きだったよ」

!? 「少しやってみるかい、安心しな、別に殺しあうわけじゃないんだ、これもババアのお節介さ」

「…先に言っておくがここはヤーナムではないぞ」

「わかってるさ…クッククッククック」

ホントにわかってているんだろうか、心配はしていないが不安にはなるぞ…

記憶鮮明、恐怖倍增、酔いは十分？

「まあ、ケガはできないからそこにある模擬刀を使うさ、預けちまってるしあんまり殺傷能力が高いとだからね、それにあんた武器持っていないだろ…これかね」

そう言つてアイリーンが手に取つたのは二本の短刀だ。彼女の武器である慈悲の刃…いわゆる〈仕掛け武器〉で通常時は一つの短刀だが、仕掛けを作動させると二枚に分かれ歪んだ刃へと変形する。それに合わせたのだろう。構える動作で感覚を掴んでみるみたいだがだいぶ様になっている。

「あんたは、それかい？なら始めるよ」

一方こちらは試し振りの際に使用したハルバード…

「はは、言つておくが体は一般人つてのを忘れるな」

むしろ一般人以下までであるが

…反応がない。アイリーンを見るともう既に構えている、もう始めろというわけか
ハルバードを構え、戦闘が始まる…

これをオペレーターから見ればドクターが間違ひなく危険なタイプの怪しい人物に

襲われているように見えるだろう。そして勝ち目が無いようにも（これは事実）。

…こちらの動きとしては基本的には攻撃に合わせるの迎撃が好ましい、リーチを活かせるからだ。問題があるとすればアイリーンの戦い方としては素早いステップからの隙を突く攻撃だ。それに反応出来なければ勝負なんて一瞬で終わる。

狩人の狩りの基本的技術にステップがある。狩人は基本的に《獣》を相手する関係で、防御なんてものは意味をなさない、圧倒的力でねじ伏せられるだけだ。そのため必然的に避けるか、もしくは狩人の基本的武器になる《銃》による相手の攻撃出始めを潰す他にはない。（ここにはない。あるにはあるがあれは形の似た全くの別物だ。あつても模擬戦では使わないが）獣の攻撃を避ける際は素早く懐に入り込む形になる。中途半端な距離が一番危ないというのは記憶に染みてる。

方針が決まったところでいよいよお互い本格的に…動く!?

アイリーンがステップを駆使して素早い動きで立ち回る。

やはりというべきかドクターの身体能力では到底追える速さではない、翻弄されている。アイリーンのレンジに入らないように下がるため徐々に壁際に追いやられる。だがヤーナム狩人としての記憶的なものなのか焦るようなことはない。死んでも生き返るような経験をしているんだから当然といえば当然だが。

ドクターはハルバードを薙ぎ払う、アイリーンは後ろへ下がるがそれに合わせてドク

ターの突きによる追撃が迫る、だがアイリーンはそれもステップで横に避けてしまう。そして突きにより生じた隙をアイリーンは見逃さない、今度はアイリーンによる突き攻撃がドクターへと迫る。それはアイリーンの模擬戦において初めてにして決着の決められる一撃である。だがドクターは隙を晒した状態だったがギリギリで横に避ける。ドクターはカウンターなら突きでくると読んでいたのだ。避けられたアイリーンは追撃には転じず構えなおす。

「クッ!」

(やはり!?…いや、予想以上に肉体的な差がでかい。突きカウンターも予想していたにも関わらずギリギリだった。同じ戦い方では押され続ける。それに一番に消耗が激しい。本当にすぐばてる体だ。…これはもう決める他ない!)

ドクターはアイリーンへ急接近しハルバードの薙ぎ払いを繰り返す。だがアイリーンには当然のようにしてステップで回避される。だがそんなことは予測してたのでドクターは薙ぎ払いの勢いそのまま振り下ろしを出すこれもアイリーンは難なくステップで避けてしまう。…だが先ほどと同じ様にカウンターが繰り返されることはなかった。振り下ろしされたハルバードは大きな音を立てて訓練室の床にたたきつけられる。…だがたたきつけられたハルバードは再度上がることはない、むしろ柄含め床に伏せるだけだ。持ち主がいらないなら当然のことではある。ドクターはハルバードの振り下ろ

しと同時にハルバードを手放しステップで避けるアイリーンに急接近する。そして、持っていた短刀で決着をつける！…はずだった。この奇襲は確かに不意を突く攻撃だと思っていた。しかし当てること叶わず避けられてしまった。しかし相手に大きく後退させるくらいには効果があつたらしい。もうこれ以上戦闘を続ける体力は残っていない。しかしまだ終わってないのは確かではある。すぐにハルバードを手に取る。

するとアイリーンが構えを解く

「……であんたのことは観てたからね隠してるのは知ってたさ」

忘れてくれていたらよかつたんだがな

「……ふん、やつぱり狩人だね、態勢を崩してるわけでもないのに突っ込んでくるのは狩人そのものさ」

「……狩人である限りは何も問題はない。問題は狩人が一人になったとき、獣へとなり果てたとき、誰かに意志を継がせてしまうことだ」

アイリーンはきつとヤーナムで狂ってしまった自分を思い浮かべているのだろう

もつとも

「もつとも、ここ（テラ）では考える必要はなさそうだが」

「……まあ、とりあえずここままでだね朝食に間に合わせなければなんだろう？」

「ああ、そうだ…さて、アイリーン、いつから居た？」

「?最初からさ」

何時からだよ!?

「まあいいか、それより今日も話がありますので朝食後はまた応接室でまたお時間いただくことになります」

「…あんた、仕事に慣れすぎだと思っただがね」

安全策は苦勞が絶えない

訓練室

「誰もいないな、まあ食堂開いた頃だろうしし当然といえば当然か」

「それってあたしも使えるのかい？と言っても持ち金が無いのはわかっているとと思うが」

「ええ、私がいれば可能でしょう、扱いとしては客ですし別室で撰ってもらおうというものもあります、食堂を利用するなら金は私が出しますよ。客なので本来金は取るものではないですが皆には伝えてはないのでおそらく新規オペレーターとして認識されるでしょうから」（たぶんみんな避けるが）

「なら食堂に行くとしよう。ロドスがどんなどころか知りたいからね」

食堂

ざわざわ…

（やっぱりこうなるのか…知ってた、Wの時もこんな感じだったし、あの時ほどではないが初めて見るやばそうな人物がドクターと並んでいるんだ。こうもなる）

「やはりこうなりますか」

「この格好なんだろうさ、替えはないよ」

「よくあることです。今日だけです。ただ……」 「あれ、リーダー！その人は？」

そのペストマスクを取ればと言おうとしたが……質問をぶつけてくるのはペンギン急便所属の射撃オペレーターのエクシアだ。見たところまだ朝食はまだのようだ。

「客だ。といつても私が招いたんだがね」

「え〜リーダーがつれてきんだー誰なの？」 「やめろエクシア客に対して詮索はよせ」

後ろから遅れてきたのは同じくペンギン急便所属のテキサスだ。……ただ君も気になっっているのが見て取れる。

「気にする必要はないよ、ただのババアさ」

初めてアイリーンがまともにテラの人間と話しているのを見るがこのぶんでは心配はなさそうだ。

「まあ、後日説明させてもらうから、今日のところは客として案内している」

「そうなんだ、でも食堂なんだね」

「要望があつてな、ああそうだと朝食まだなんだろう、席一緒にいいかい？」

「いいよー私たちもまだだったし」 「そうだな、構わない」

「ありがとう」

それぞれが朝食を注文し届いたため席についた…が

アイリーンはペストマスクを外した。ヤーナムでの記憶では素顔を見ることは無かったが顔は歳を感じさせるがそれでも老いているという表現は正しくない力強さを感じるヘラグとどつちが年上なんだろうか。

「そういえばあんたたちの名前を聞いてなかったね聞かせてもらってもいいかい?」

「そっか言っただけだったね、私はエクシア。ペンギン急便という運送会社で働いてるんだけど今はロドスと一時契約しててここにお世話になってるの」

「同じくテキサスだ」

「他にもいるんだけどね」

「そうかい、あたしはアイリーン。小さな街で狩人をやっていた、今は…なんだろうね適当に生きてるよ」

「どうしてロドスに?」

「昨日街にいたときドクターに会ってね、それで話すためにここにいさせてもらっているのよ」

「ん?リーダーロドス以外の人と知り合い居るの?」

「いや、これに関しては少し（嘘）特別で偶々アイリーンら狩人達と関りがあっただけで、他にあったとしてもロドスのドクターとしてだ」

エクシア：「こうもピンポイントで答えずらい質問攻めはやめてくれ綻びが出る。そしてその質問はまるで私にプライベートな知り合いがいないみたいないな感じだ。」

：「一つ思いついた。話をそらそうちようどいいネタがある。」

「そういえばアイリーンは銃を使うぞ（アーツも使わない、威力もイカレた別物だろうかな）」

かなり無理やりだがエクシアには十分だろう

「え!? そうなのみたい!」

「残念だがロドスに入る時に没収されたので今は見せられません。というかおそらくエクシアの想像するいずれにも該当しないと思うぞ」

「そっかー残念」

「まあこれからある話次第では機会はあるかもしれないから期待してる」といい」

そう、これからある話では絶対に確定させなければいけないことがある

・ アイリーンをオペレーターとしてロドスに駐在させること

・ これから増える可能性のあるヤーナム関係者を保護（表向き）すること

この二つあとできれば

・ヤーナムに関する一部情報を秘匿させること

これに関しては黙ってればいい（場合によっては公開するが）

「ということでは我々は先に失礼させてもらおう」

「じゃーねー！アイリーンさん今度銃見せてねー！」

廊下

今はドクターとアイリーンのみが居る現在応接室まで移動している

「あんたに聞きたいことがある」

アイリーンが質問する

「どうしましたか？」

「角や天使の光輪、しっぽに耳それがあつたのは驚きだがそういうものなんだろう、あたしが聞きたいのはいくつかの人間に見られた体表の黒い物、あれなんだい？」

アイリーンにとっては黒い物に対する疑問は良くないものであるのなんとなく予想できていたが、それでも『目を引く』ものだったからに過ぎない

だから、ドクターが大きな間を開けたことにアイリーンは確信を抱いてしまった
あれはダメだと

「…あれは〈鉱石病〉オリパシー、このテラにおいて最も危険視される病気です」

「……そうかい、ここにもあるんだね、そういうのが」

アイリーンの声はどこか疲れたような雰囲気を出している

「ロドスは製薬会社で現在治療法の研究、および感染者へのサポートを行っています」

「そうかいだから食堂にいた一部の奴は訓練された人間だったのかい」

「ええ、感染者の立場は国によって様々ですが大抵いい扱いはされません、ですのでここ
は行き場を失った人が集まり感染者の権利を取り戻すために日々努力しているのです。
なるべく正規の方法で」

私の知る狩人たちはいずれも強力な者たちばかりだった。それこそエリートオペ
レーターたちと遜色のないほどに、だからこそアイリーンには協力願いたい

「アイリーン、このテラであなたの、他に居るかもしれない狩人達の力を貸してほしい。協力してくれないか」

「…結果は聞くまでもないだろう、ヤーナムでもやってたことさね。場所が変わろうがあたしは狩人さ。狩人狩りだがね」

ヤーナムは取り扱い注意

「源石はこのテラにおけるエネルギー源なんですよ、多かれ少なかれなエネルギーを蓄えるものでこのテラにおいて重要な資源になります。ただ、源石についてはいまだ多くの謎が残っており多くの学者が研究を行っているそうです。記憶を失う前の私もその一人だったようです…今の私にはその知識はないですが。源石は良くも悪くも私たちのテラに大きな影響を与えています。その一つに〈鉱石病〉オリパシーが含まれていますが。私は記憶を失っているので聞いた、読んだ話としてしか説明できないので詳しい話は医療オペレーターに訊くべきでしょう」

「なるほど、抑えるにもその源石が必要だから手に入れるために感染者が増えるというわけかい…ふん、ヤーナムと変わらんね、もつともヤーナムと違って感染はい終わりつてわけじゃないのが救いかね」

「ヤーナムと比較するのはどうかと思うが…思いますがね…」

「…記憶を失うってのは思う出した後も苦労するんだね、まあ、当然っちゃ当然だがね。一つ言ってみるとすれば隠し通すつもりなら覚悟は決めることさ」

「もうとつづくに済ませてあります」

「続きです。これは追々見てもらいますが源石は膨大なエネルギーを蓄えているといいましたがそれを利用して一人の間人が超常的な現象を引き起こすことができるようになりました。アーツと呼ばれるもので個人の差が大きく出ます。ヤーナムでいうところの秘儀に近いものです。アーツは才能が基本的にものをいいますが…〈鉱石病〉オリパシー患者は非感染者に比べ格段にアーツ適正が高くなります。それが理由で自ら感染者になる、ならざる得ない者がなってしまう事例もあります。」

「当然のことだね」

「ええ、でもあつてはならない」

「あんたはどうしたい、正直あたしはだいぶ厳しいと思うよ。ヤーナムを知っている身としては」

「だがやらない理由にはならない、まだテラには希望が残されている。抗うには十分すぎる」

「ああ、そうさね、希望があるのはいいことさ…裏切られなければいいがね」

「それも…これからの話がすんでから考えるべきだろ…でしょう…」

「…頼んだよ、あんたにかかっているからね、あたしは何の話をするのか知らないからね」

「……」
応接室ではソファアー二つの内一つはアイリーンが、もう一つはドクターが机を挟んで対面する形で座っている。残りは横に立ってこちらを監視している。明らかに私も問い詰めるつもりだ。

ケルシーそんなに怖い顔をしなくてもいいだろうに、そしてアーミヤまで連れてきたか、まあ、予想してなかったわけじゃないから、そしてレッド、あとホシグマなんぞそんなニコニコしてるんだ？君はケルシーの顔を見てないからそんな顔ができるんだ、ケルシーの後ろにいないでこっちに来てみるあれは般若だ、よくもまあクロージャはあれに睨まれてなおいたずらができるものだ、アイリーンがいなければ情けない声を躊躇いなく出してるとこだ。

「……ケルシーすまないが客の前だそれはよしてくれ」
「……」

よし、無視しよう

「さて、アイリーンさん聞きたいことでしたね「その前にいいかい？」……どうぞ」

「今までもすまないね……いつい狩人としてあんたを見てしまったからね……『ドクター』」

!?

「そうさね…あんたから見てどう映ったんだい」

「そうだな、今まで、いや訓練室であんなことをしていたから余計に私を『私の記憶の中にいる狩人』として見ていたのだろう」

「ヤーナムのことですね。そうですね悪夢ですよ少なくとも私にとっては」

私はドクターだ『狩人の記憶』があろうがこのテラではドクターとして生きている

「そうかいよかったよ。あれ以上なんてあつていいもんじゃない…：まあ、ヤーナムもあつてもいいものではないがね」

「ドクター、我々を置いて勝手に話を進められては困る、それに君が何故彼女アイリーンやヤーナムという私の把握していない街の事を知っているのか説明してもらいたいのだが」

「おっと般若の口が開いた（今はそうでもないが）。流星に聞いてきたか」

「すまないがヤーナムに関して言うとあまり詮索してもらいたくない、ヤーナムを知ることが被害者を増やすことに等しい。これは理解されるとは思わない。ヤーナムを知る者すべてが同意見だろう」

「そうさね、こればっかりは聞かない方がいい」

「ドクター、一つ約束してくれここロドスは様々な事情を持つオペレーターがいる、今回もその一つとして扱うが面倒なことになる前に言ってくれ」

「ありがとう、そしてすまない」

執務室

「ケルシーには頭が上がらないな」

「いつものことだと思えますけどね、それよりドクター、アイリーンさんに関する書類はできているんですか？」

「ああ、自身のプロフィールに関しては書いてもらった。」

ただ、アイリーンが書いた書面はケルシーやアーミヤ等が言っていたが書いた本人と私以外が見るとおかしなことに文字自体見たことは無いと言うのに理解は出来ると言っていたのが気掛かりだ、何者かが仲介を…いや多分へ上位者によるものなのだろうが、そうだとするともしもの対応策を考えなければならぬ、明らかに文化圏の違う者同士なのだから会話できている時点で気づくべきだったかもしれない。今更ではあ

るが。

「やはり戦闘オペレーターになりますか」

「そうだな、彼女のことはよく知っている。ロドスの活動と彼女ら狩人の活動はかなり別のものとなるからこちらに慣れてもらうために、一定期間はロドスの訓練に参加してもらうことになるだろう」

「交流もそこで深めてもらうんですね」

「そうゆうことだ」

「明日、訓練があるしそこに入れてもらおう、確か教官はドーベルマンだったな」

「確か基礎訓練ではなかったですか？アイリーンさんには必要ないと思いますよけど」

「確かにそうかもしれないが一緒に訓練する者たちにとっていい経験になるはずだ、まあ、参考にはならないと思うが。・・・ホシグ「コーヒーですよね」・・・うん、ミルクは無しで」

—————
龍門市内

龍門市内の中心、夜でもあるに関わらず活気あふれる街頭に怪しい人物が手に持つ杖を静かに突き立て独り言ちる。

「…どれもこれもヤーナムと一致しないな…明るい、それに獣の匂いもしない…此処は

一体何処だ？明らかにヤーナムよりも発達した技術、そして繁栄。何より普通の人間ではない、がそれを気にする者は居ない。どうなっている？他の者はどうなっているか……」

仕立ての良い何処かの軍人が着けるような制服、だが着用している男にその様な雰囲気は感じさせずどこか恐ろしさを感じさせる。何より頭はバケツを思わせる鉄兜、明らかに荒事も辞さない事を示すような出で立ちに街の人間は避けて通り過ぎる。

「いや、もうそんなことを心配する立場でもない。そもそも何故兜は奴に……いやそもそも奴は何だったのか、この記憶は確かに……まさか夢でも見ていたわけでもあるまい、奴は何だったんだ？」

「この街の言葉は分かる、だが違和感だ、同じ音を発しているようには思えない……だが幸い人の思考は健全そのもの、狂った様子もない、ヤーナムとは大違いだ。話を聞くことは十分可能だろう」

疑問を口にする男に応える者は無く、明るく照らされた夜の街を男は端へ端へと歩いて行く、騒がしいのは御免だと言うように